

異文化間の相互理解

李 玉 麟

はじめに

異文化間の相互理解の重要性は多くの人々が強調しているが、実際に相互理解するのはなかなか容易なことではない。端的に言えば、相互理解とはお互いの共通点と相違点を知ることである。問題は、それを知ってからいかに対処するかにある。つまり、共通点はさておき、相違点に対して尊敬の気持ちを込めて客観的に正しく評価する気になれるかどうかである。

1998年9月24日の《朝日新聞》の第二面に次のような記事が載っていた。ニューヨーク・タイムズの記者が三重県の小さい町で72歳の女性にインタビューしたときに、40年の結婚生活で夫に「一度も好きだといわれたことがない」といったセリフから「日本の夫婦に愛なんて要らない」という見出しでアメリカの新聞に記事を書いた。それを読んだニューヨーク在住の日本人11人で作るグループ「ジパング」が、『笑われる日本人』という本を自費出版して、そのアメリカの記者が書いた記事を論難した。ニューヨーク・タイムズ紙はいかに日本を紹介したのかは分からないが、しかし「日本人には愛がない」と断言するのは妥当ではないと思う。

ある哲学者は異文化について次のように語った。「人間の本質はいつもみな同じだ。彼らを分けているのはただその習慣だけだ。⁽¹⁾」アメリカ人は一日になん回も「I love you」といっても飽きない。それに対して日本人は、いや、中国人でも

「愛」という言葉をほとんど口に出さない。特に年配の人が「愛しているよ」という言葉を出すのは恥ずかしいと思っている。だからといって、愛がないとは言えない。ただ表現の形式はアメリカ人のそれと異なるだけである。新聞は大衆に伝達するメディアである以上、なるべく客観的にしかも正確に報道すべきである。あまり大袈裟なことを言うと、誤解を招く恐れがある。特に他国のことを報道する場合、一層慎重に取りあつかわなければならない。そうしなければ、誤報によって他国民の心を傷づけかねない。ところが、どうも新聞にはこのような誤報が多いような気がする。実際は新聞だけでなく、テレビやラジオやインターネットなどにもこのような間違いが決して少なくはない。さらに、国際化を迎えた現在、各国民の間の交流がますます盛んになっていると同時に、異文化による「言葉摩擦」もどんどんエスカレートしている。

長年来、日本文化の研究も日本の歴史や社会、経済、文化、教育、言語及び生活習慣などの各分野にわたって幅広く行われつつあり、今日では確実に長足の進歩を遂げたが、しかし当面の現実から見れば、異文化についての対象・比較研究はもっと進める必要があるのではなかろうか。

—

日本人の「不可解さ」が外国人の間でよく話題になっているが、ここでは、まず、日本人の奇怪な喜怒哀楽の表現を考えてみたいと思う。たとえば、ソウル・オリンピックの閉会式で、各国の選手たちは楽しげにハシャギ回った。あの時、日本選手団は、マジメくさっていたが、途中から日の丸の旗を中心に固まって走り回った。が、ハメを外すのはその程度で、スタンドにまで上がっていったり、円陣を作って肩を組んでダンスをしたりする外国の選手たちに比べたら、どことなくマジメ臭さが抜けていなかった。儀式を大事にする日本人にとって、式次第を乱すのは良心が咎めるからなのだろう。

裕仁天皇がご病気だと聞いて、わざわざ記帳に行った人が一千万人を越したという話は、外国のマスコミに何度も報道された。「国民として心配する気持ちを表現した行為が、近代国家日本のイメージとは非常に違う」という見方がそのニュ

ースにコメントとして付け加えてあった。そういう点になると、日本と外国とでは食い違う点は少なくない。

次に、笑いについて考えてみよう。『言葉で探るアメリカ』（加藤恭子、マーシャ・ロズマンニ共著ジャパントイズ社刊）には、あるアメリカ人の女子学生が、日本人について語った言葉が引いてある。

「寄宿舍で、日本人女子学生と同室だった。いい友達になったと思ったのに、私が何か失敗したり、悪いことが起こったりすると笑うのだ。彼女はわたしにとって本当の友達ではなかった、⁽²⁾と。」

日本人女子学生は、「箸が転んでも笑う」のだから、相手が何かに躓いて転んだら、大声を出して笑うに違いない。スカートのホックが外れていても笑ったかもしれない。人が失敗したり困ったときなど、なぜ相手を笑うのか、アメリカ人には理解できなかったわけだ。

『言葉で探るアメリカ』の著者は、「日本人は、おかしいから笑うとは限らない。悲しい話をしてにこにこしたり、相手の失敗も笑うことで軽減したりしようとする。しかし、相手にはそうとは通じないわけである。⁽³⁾」と説明している。

笑いに通じない場合は、これだけではない。日本人は、なんとなく微笑することがよくある。たとえば、テレビの女性アナウンサーたちは、天気予報の際にも微笑するし、スポーツのニュースを読むときも薄笑いを浮かべることが少なくない。あれは外国人には理解できない笑いだ。あるいは、カンニングが見つかった学生が照れ笑いをする。ああいう際には、欧米人どころか中国人も絶対笑わない。

ダ・ビンチのモナリザの微笑がよく研究の対象になるのは、あの笑いがなんの目的のためなのか、欧米の人々に分かりにくいからだ。「あれは病気の印だ」として、病名を挙げた論文もあった。「何か笑う目的がないのに薄笑いするはずがない。」と欧米人は考えるので、気になるわけだ。日本なら、ああいう微笑は電車の中でもよく見られる。

さらに、あるイギリス人が日本に来て、日本の女性と結婚し、帰化して名前も小泉八雲と改めた。彼は日本紹介の文をたくさん書いている。その中に、「ジャパニーズ・スマイル」についての随筆もある。あるとき、彼の召使の中年の女性が、

「自分の夫が亡くなった。」と言って休みを取って帰った。そして、箱を持って帰ってきて、「これが自分の夫のお骨だ。」と言って笑ったのだそうだ。そこで彼は、「日本人の笑いは実に不可解だ。」と書いている⁽⁴⁾。

日本人はこういう時に泣く人より、涙を抑えて笑顔を見せる人のほうがを立派だと尊敬する。

文豪の森鷗外が危篤になって息を引き取ろうとする際、鷗外夫人が泣き叫んだら、鷗外の親友の賀古鶴所が「見苦しい。あっちへ行け」と怒鳴りつけて引き離したという。鷗外夫人のように感情を率直に表現するのは、今でも「取り乱した」と見なされるはずだ。泣きたい気持ちを抑えて顔に笑いを浮かべることのほうが、日本人にとっては上品なのだろうか。

日本人の泣き方は、中国とも韓国とも違っているようだ。ソウル・オリンピックで、柔道の金メダルをとった斎藤選手は、国旗が上がる時顔をくしゃくしゃにして泣いた。日本のマスコミは、よほど感心したものらしく、あの泣き顔を何度も何度もテレビの画面で紹介していた。新人類と見られている男子体操の高校生の金メダリストも、受賞のときに涙をこぼしたら、アナウンサーは涙につり込まれたような声で賞賛の声を挙げていた。一方、陸上競技で外国の女子短距離選手が、優勝表彰式でちょっと涙をこぼした後、輝かしい笑顔を見せたのが印象に残っている。あの笑顔と斎藤選手の泣き顔は、ハッキリと文化の差を示している。どうやら、日本選手はよく泣くと、賞賛されるようだ。

年末のレコード大賞などでは、「入賞したら、泣きなさい」という演技指導をされるという噂もある。作詞家の阿久悠も大賞をもらったときに、涙を見せなかったら、「冷たい人」と非難されたそうだ。あの田中角栄も、汚職裁判の法廷陳述での泣き声になったのが話題になったが、これも泣くことが美德になっているからだろう。

以上の事例に照らして考えれば、日本人は確かに不可解な点が数多くある。

二

ここ十数年来、外国の人々は日本に大きな興味を示している。というのは、第

二次世界大戦後、日本はわずか数十年の間に戦後の苦境を抜けだして、ほとんど何の資源もなしに工業的にも経済的にも世界のトップに躍進したわけである。これはおよそ外国人にとってはもっとも魅力的なことではあるまいか。だから各国の人々は大きな好奇心を抱いて四方八方から洪水のように日本に流れ込んでいる。もちろん来日の目的はそれぞれ違うし、経歴も違う。特に駆け足の観光をした人はごく偶然な事象を誤って、それを誇張することが多い。率直に言うと、そのような見聞や体験は表面的な段階にとどまることが少なくない。またどれだけありのまま伝えるかも問題になる。

たとえば、ある人が開発途上国から一週間ぐらい日本へ見物に来たとしよう。帰国後、「日本の印象はどうですか」と聞かれると、「いや、さすがに先進国ですね」と即座に答えた。それならよいが、続いて「日本人はみんな金持ちだよ、日本で二、三年働けば、きっと大金持ちになるぞ。」といったら、それは周りの人にどんな大きな誤解を与えるか想像できるだろう。そこまで考えず、事実上、言う人はそこまで考えず、ただ自分の想像力を勝手に最大限に膨らませるだけだ。にもかかわらず、聞いた人は真に受けるようになる。その中には、借金して家族の安否を省みず、思い切って日本へ出稼ぎに行く。運がよければ、何とかなるが、運が悪ければ、ひどい目にあってしまう。その事例は枚挙に暇はないが、日本は果たして外国人にとって天国であろうか。それはともかく、被害者を誰が救済してくれるのか。泣き入りする以外に方法がない。しかし、このような事態が続くと、「日本人は外国人に冷たい。」という結論を外国人が下すことになる。

ご承知のように、日本人は明治時代に外国の事物をあんなに熱心に研究したり、外国の先進的な思想やものをどんどん受けいれたりしていたのに、なぜ外国人に対して、そんなに冷たいのか。「なかなか不可解な日本人だなあ」とこぼした人もいる。この問題について、今は亡き言語学者鈴木孝夫はこのように述べている。

「わたしはこのような比較を試みた結論として、日本人は昔から外国の文化文明には憧れるが、外国人そのものは好きじゃないという、人間抜きの、「ものと書物」無人外国文化摂取の基本型が今なおあまり変化していないという印象を持つ。⁽⁵⁾」ここから見れば、日本人には無人唯物論で外国人を見る癖があるようだ。また、

江戸幕府の鎖国政策と無関係だとは言えないだろう。事実、現在でも、日本人は自分から外国人と接しようとするのが少ない。さらに、近年外国人の犯罪事件の頻発にも大きな関わりがある。そのなかにバーでいろいろ楽しんだ後、自分の国では、ホステスが飲んだ酒代を客が払う習慣はないとゴネてその場で刑事に押さえられた人もいる。このような報道に嫌気がさして、外国人となるだけ接触しないのが無難だと思っている日本人が多い。

だからと言って、日本人が外国人と接触せず、外国に無関心でよいはずがない。むしろ積極的に他国の出来事に関心を寄せるべきだ。朝日新聞は1998年9月17日第14面の論壇欄の中に「インドネシア華人の人権と日本」という見出しがある。筆者はシンガポール人であり、今年インドネシアの『五月暴動』の期間、たくさんの華人が被害を受けたことについてこう語った。「ところが、日本社会はこの悲劇についてほとんど関心を示さないようだ。政治家や民間団体が抗議したというのも聞かない。アジア人としての共同情感に欠けるために、地域の出来事に関心がないだろうか。女性の基本的人権に対する認識が異なっているために性的被害を重要とみなさないのだろうか。「反日」と「排華」は別にものだとして、対岸の火事と見ているのだろうか。……日本が近隣諸国での非人道的な行為に沈黙を守ることは日本人の人権感覚に対する国際社会の疑念を招くことになる。(6)」だとすれば、日本はアジアとの距離をさらに広げることになりはしないか。

現在の日本の近代的な高層建築、車社会、新しいデザインのドレス……といったものを数え上げていくと、国際化といった点で日本は外国に劣っていないと思っている。だが、日本人にはどこか国際人として欠けるものがある。たとえば、ベトナム難民の受け入れは、人数から言うと、日本は非常に見劣りがする。

木村尚三郎は《耕す文化の時代》(ダイヤモンド社)で「日本人は典型的な農耕民族であって、獲物を追って、野山を駆け回る狩猟と違い、畑仕事でじっと観察する傾向が強い」と言っている。そして、次のようなコメントがある。

「現在でも、何か国際的な事件が起こると、日本政府はいつもじっと事態の推移、なりゆきを見極めようとする。自分から積極的に働きかけることはせず、世界の流れに身を投じようともせず、文字どおり「居ながらにして」世界を知ろう

とする。それが今も日本人の生き方なのである。(7)」

近年来、日本は脱亜入欧だとよくアジア人に指摘される。戦後、確かに経済復興によって、日本に巨大な繁栄がもたらされた。アジア人としてもそれに高い誇りを持っている。しかし、日本人には自らを先進国とする先進意識がしばしば頭をもたげてくるのはあまり感心しない。諸民族の持つ固有の価値体系や歴史を基盤にすれば、先進、後進などの区分を慎重に使用すべきである。とりわけ日本のメディアも要注意である。たとえば、中国紹介についても、いつも貧困地域を背景にした映画または番組を放送するのはあまり良くない。中国でも近代化を目指して、努力している。なるべく活気にあふれる様相を紹介するように。これは中日両国の若い世代の友好のために、不可欠ではあるまいか。

三

日本語の中にも「郷に入らば郷に従え」という諺がある。つまり、したがっていけば何でも無事に済む。とはいえ、実際問題になると、なかなかそうは行かない。ごく表面的な付き合いなら、お互いに何とか我慢できるが、長く付き合っていけば、世の中の常識とは逆に、かえっておたがいに嫌になってしまうケースもある。というのは各民族の固有文化が根強くしみこんでいるからである。どの国の人でも、幼時から自国の文化のなかで育っている。だから、他国のそれと比べたら、いかにも自国の文化のよさだけを強調したくなるようだ。とりわけ異文化と接触すると、他国の習慣などが奇妙に思われる。

たとえば、ある中国人は日本人の同級生と共にどこかへ遊びに行く途中、お腹が空いて、レストランに入り、「きょうはぼくがごちそうするよ」と日本人の学生に言うと、向こうは怪訝な顔で「なんで？」ときたので、「いや、別に……」と答えるほかなかった。このような場合に、双方とも心の中では「おかしいな」と思っているかもしれない。一方では中国人は「好意をもって、ご馳走しようとしたのに、断られてしまった。」と感情を害する。これに対して、他方の日本人は「何の理由もないのに、なぜごちそうしてくれるのか。何か下心でもあるのでは？」と疑う。結局、二人とも興ざめしてしまった。もちろん、もしおたがいにその相

手国の習慣を知っていたら。何も問題にならない。しかし、一見二人だけのもののように思われるが、実は二人とも相手国の人間の一部を見て、それが全体像だと印象深く頭に刻んでしまうことになるのだ。その後、開口一番「日本人は何々」とか、「中国人は何々」とかと言うようになる。このように、たった一回の付き合いだけで結論を出すことは決して少なくない。異文化に接したときに、人々はよく数少ない体験からの外的な一般化を試みることがある。「外国人は……」と言った俗流民族文化論の多くはこの類である。もちろん体験が少ないからと言って、それからの一般化がすべて誤っているということにはならない。逆に体験豊富だからといって、一般化が正しいとは限らない。むしろ優れた洞察力によって、数少ない体験からの的確に本質を抽出し、正しい一般化を行う人もいる。しかし、常識的には、少数例からの一般化は的外れである危険性が大きいと言っていい。的外れはやがて偏見につながる。さらに私たちは単なる個人的な差でしかない違いを民族的、文化的違いであると錯覚しがちだ。その程度の違いなら、同じ国の人同士のあいだでも珍しいことではないはずなのに、相手が外国人であったりすると、違いは一挙に民族的、文化的な違いであるかのごとく大袈裟に誤解されてしまう。

四

前に述べたニューヨーク・タイムズの記者は日本人が「愛なんか要らない」と断言する動機は何か分からないが、記者の職業として、多少猟奇的な心理を持って、いたるところでインタビューする。ましてや日本の文化についてどれぐらい知っているかも大きな疑問である。言葉は人間の生活と密接な関係がある。日本人は昔からの言語生活の歴史の中で、ことに夫婦の間で、いつ言葉を使うのかと言うと、ここで今は亡き司馬遼太郎の書いた「日本人と日本語」の中から一段落を引用してみよう。「日本人は土着から始まる。あそこのお嫁さんはどこから来たとか何とかみんなに分かっているから、言葉は要らない。言葉と言うものはどういう時に使わないかと言うことを考えるとよく分かる。結婚したばかりの男と女がいると、これは一部屋にいて、一日中口を利かないだろう。なぜなら、亭主が

あそこで字を書いている。女房はそこで針仕事などをやっている。口も利かない。ちゃんと分かっておって、男はお茶がほしいなと思うところに、女がお茶を持っていく。⁽⁸⁾」

周知のことだが、日本は国土が狭い上に、火山も多い。だから、一人当たりの農耕地の面積が極めて小さい。いったんどこかに住み着くと、簡単に移動できないのである。したがって、農民は相互によく知り合っていた。そして、ほぼ単一民族だから、生活上の約束はさほど複雑ではない。何事も決まったルールどおりに行われる。だから言葉は不必要だ。たとえお互いに口を利かなくても、何の矛盾も感じず、意志疎通を欠く事はない。つまり、以心伝心で意が通じる。もし「愛」がなければ、一億二千万人の日本人はどこからやってきたのか。

昔の日本では、夫が出かけるとき、妻は夫の洋服や持ち物をすべて準備し、その上、靴下や履物まで夫の足に履かせる人もいた。また、夫の帰りが遅いと、夜中になっても、寝ないで待つのが普通だ。

それに対して、西洋の夫は、ほとんど自分で服装をつけ、日用品を用意する。そして、場合によっては、男性が女性の靴紐を跪いて結んでやることもある。帰るのが遅れたときは、妻は寝てしまい、お手伝いさんも寝てしまう。

今日の日本の奥さんたちは、「亭主達者で留守がよい」とばかり、夫の帰りが遅くなったら、さっさと寝てしまうだろう。夫のほうも「カエルコール」をする人は半分ぐらいだ。その点では、かなり西洋式のライフスタイルが日本にも入ってきているといつてよいかもしれない。

しかし、そうはいっても、まだ昔のしきたりがかなり色濃く残っている。夜遅くまで寝ないでお父さんの帰りを待っていたお母さんの姿を覚えている人は少ない。

OAがアメリカなどよりも進歩している日本の会社でも、男性社員がお茶を持ってくることはほとんどない。コーヒーをお盆に載せて持ってくる男性社員などはゼロに近いと思う。そういうところが、昔ながらの日本が国際化しないまま残っているといえよう。

心の国際化が一番遅れていて、一番難しい部分は、こういった例でもわかると

思う。海外駐在の日本の商社マンも、近代的な生活の裏側では、結構古い時代とあまり変わらない価値観で生きていることも忘れてはならない。

愛情の表現形式も例外ではない。日本のテレビドラマの中で、男が女にプロポーズする場面で、顔を赤くして、悪いことをした子供のように、何度も口をこもって、最後に渾身の力を出して、やっと「結婚してください。」と言い出すのを見た。どうやら恥ずかしがっているようだ。いわば、日本人は言葉の出し惜しみをしているようだ。この点から考えてみれば、「愛」という言葉は口に出さなくても、愛なんか要らないとは言えない。

おわりに

異文化を理解するための前題条件として、一にも二にもそれぞれの文化を深く知る必要がある。しかし、これが実に難しい。というのはお互いに自国の文化の優位性を認め・他国の文化を排斥しようとする人間の心理が介在するからである。だから相手国の文化を理解するには、まず謙虚な態度が必要である。たとえば、個人的な付き合いなら、「日本人はけちくさいとか」、「中国人はうるさいとか」と言われる場合に、聞いた人は何も怒る必要はない。そう言う人はきっと何か理由があるに違いない。しかし、聞いた後「それはごく稀にしかないことだ。わたしは決してそのような人間ではない。わたしと付き合ってみてください。」と言ったらどうであろう。あるいは、相手国の習慣がわかったら、気に入るかどうかは別として、相手の習慣をできる限り許容しなければならない。どこの国の人間でも誉められることが好きであろうと主張する人もいるが、国の文化は本来善し悪しで評価するものではない。問題はその文化に属する人が他国の文化にどんな態度を取ろうとするかにある。人からの尊敬を受けるにはその人を尊敬しなければならない。尊敬の気持ちをもって初めて他国の文化に対して正しい評価ができる。要するに、人間はすべて平等であり、現代のように縮小しつつある地球の上では、相互依存こそ最も重要である。

日本の中でも、関東の人の好きな納豆を、関西の人には食べられない人がたくさんいる。食べ物だけでなく、挨拶の仕方でも、お世辞の言い方でもかなり違う。

しかし、このような状態でも摩擦なしに共存することができるはずだ。

異文化の間でも、外国人に不快感を与えるものをできるだけ改めていく必要がある。いままで、日本人は外国人に何か言われると、すぐ尻込みしがちあったが、今度は「笑われる日本人」の著者十一名の日本人に脱帽した。自国の民族習慣は自分でしっかり守るべきだ。何でもアメリカ人の考えに同調する必要はないのではあるまいか。

また、味覚や泣き笑いなどは、外国人が拒絶反応を起こしやすいからといって、すべてを改める必要はないだろう。お互いに相手の価値観を理解し認め合うことによって、異文化間の違いを克服することができるはずである。要するに、問題は食わず嫌いで、相手の文化に対して、反感や憎悪を抱かないようにすることであらう。異文化の間の溝を埋める努力が大いに必要になる。

相互理解から友好にいたる道程は決して平坦なものではない。21世紀に向けて、お互いに尊敬しあって、異文化との共存を可能とする体質を作り上げるように努力しなければならない。

(注)

- (1) 別技篤彦『日本の姿』株式会社ティビーエス・ブリタニカ(祥文堂1980年7月20日発行)71頁12行至13行。
- (2) 板坂元『異文化見聞録』株式会社中野書店(文化新聞社1990年4月16日)95ページ
- (3) 板坂元『異文化見聞録』株式会社中野書店(文化新聞社1990年4月16日)96ページ
- (4) 板坂元『異文化見聞録』株式会社中野書店(文化新聞社1990年4月16日)95ページ
- (5) 鈴木孝夫『武器としての言葉』株式会社新潮社(1985年9月20日発行)297ページ
- (6) ウォン・ピンファ『朝日新聞』1998年9月17日発行14版「論壇」
- (7) 板坂元『異文化見聞録』株式会社中野書店(文化新聞社1990年4月16日)127ページ
- (8) 司馬遼太郎『日本語と日本人』(読売新聞社1978年8月25日)65頁9行至16行